

2021 年度『アタシノアカシ』活動報告

中山 文
中山ゼミ 3 年次生

以下は 2021 年度人文学部 3 年次生で専攻演習Ⅱ中山ゼミに所属し、「アタシノアカシ」の上演に携わった、19 名からの報告書をまとめたものである。ⅠからⅢはゼミ生が分担執筆し、Ⅳは中山が執筆した。

Ⅰ・経緯

今回は前期に、ゼミ生全員が一人一作、明石をテーマとした脚本を書き上げた。同じテーマであっても 19 通りの個性豊かな作品が集まった。ゼミ生それぞれのバックボーンや興味関心によって、全く違う作品が出来上がったことが非常に興味深かった。そして演出家・小原延之氏にそれぞれ講評をいただいた。ゼミ生全員、そのような経験は初めてだったため、貴重な意見や感想をいただけたことで自身の感性や視野を広げる良い機会となった。さらにその講評を基に全員が夏季休暇中に台本のブラッシュアップを行った。ブラッシュアップされた台本を基に数回の読み合わせを重ね、投票で今回上演する三作品が選ばれた。その三作品とその作家は以下の通りである。

作品名	作家
『夕暮れの夏』	安田侑花
『ある晩のこと』	根來悠
『明石の城にはだれもが集まる』	山崎広陽

以下は各作品のあらすじである。なお、あらすじはすべて 2021 年度「アタシノアカシ」のために設置されたホームページ*記載のものを引用した。

(*「アタシノアカシ 2022」・<https://atashinoakashi.wixsite.com/2022>・最終閲覧日 2022 年 2 月 5 日)

●『夕暮れの夏』

“黄昏時。柿本神社に参拝した、ひとり悩んでいる女性・みよ。ため息をつき空を見上げる彼女の前に装束を着た男性が現れる。”

●『ある晩のこと』

“仕事を終え、疲れ果てた様子の佐藤。残業をしたせいでどこもかしこも閉まっている、と毒づきながらコンビニで買った酒を手に提げ歩く。ふと、一人の女性が植込みのふちで小さくなっているのを見つける。”

●『明石の城には誰もが集まる』

“明石城の周辺を根城にしている喜春姫は、明石城建築当時からずっと明石を見守ってき

「アタシノアカシ」

た。今日も二人の家臣と共に城の周りをふよふよ漂いながら、面白い事を探している。”

この三作全てが、現実とファンタジーが融合した不思議な物語であったため、2021年度中山ゼミ生オリジナルのサブタイトルとして「フシギノアカシ」を掲げることとした。このサブタイトルを付けたことにより、今回の公演における方向性が決まった。

作品が決まった後に行ったことは主に二つある。まず一つ目は各作品の演出家とキャストを選出することである。キャストはゼミ生の希望と、これまでの読み合わせを踏まえたうえで作家の希望を交えながら決定した。各作品の演出家とキャストは以下のとおりである。

作品名	演出家	キャスト
『夕暮れの夏』	安田侑花	みよ：藤定花菜子 柿本人麻呂：田中進之介 ひのか：柏木美来
『ある晩のこと』	根來悠	佐藤：上田慎也 道敷：藤田野有花
『明石の城には誰もが集まる』	山崎広陽 頼実玲奈	喜春姫：石井杏奈 右之助：森椋祐 左之助：本杉俊一郎 まっちゃん：橋本翔斗 梅野：頼実玲奈 竹崎：田中柊也

また、各作品の音響・照明担当者は以下の通りである。

	照明	音響
『夕暮れの夏』	【メイン】 益田波華 【サブ】 根來悠、橋本翔斗	【メイン】 森山聖夏 【サブ】 山崎広陽、田中柊也
『ある晩のこと』	【メイン】 益田波華 【サブ】 谷日向子、安田侑花	【メイン】 森山聖夏 【サブ】 矢野杏子
『明石の城には誰もが集まる』	【メイン】 益田波華 【サブ】 田中進之介、藤定花菜子	【メイン】 森山聖夏 【サブ】 柏木美来

II・作家の言葉

●『夕暮れの夏』について（安田侑花）

この作品は、柿本神社で起きたある夏の出来事を題材にしている。なぜ柿本神社を舞台に作品を作ったのか。台本作成をすることになった際、兵庫県の出身ではない私は明石には何があるのかインターネットで調べることから始めた。そこで出てきたのが柿本神社であった。また、私自身演劇部に所属しており、当時読み合わせで和歌が出てくるものを読んでいたこともあり、より興味を引かれた。

柿本神社に実際赴いたのがちょうど夕方、神社の厳かな雰囲気や人がいない静かな神社がより神秘的に見えたのと、赴いた時期が夏頃の暑い日だったということもあり、夏の行事として「お盆」。そこから考えこの『夕暮れの夏』ができた。

作品自体は会話劇で、神社にお詣りに来た女性みよとその神社の神主であろう柿本の二人が話し合うシーンが主である。照明も音響も最低限のなか、ほぼ役者の演技で魅せる作品なので、役者の方はかなり大変な思いをしていると感じている。

今回の作品に登場する「みよ」「柿本」「ひのか」についてであるが、彼女たちはこの物語の架空の人物であり、実際どこかにいそうな人として書いた。

「みよ」は今作品の主人公にあたる人物で、大学生にある就職活動の悩みを抱えた人物であるが、ただそれだけではなく既に亡くなっている人物でもある。難しいのは本人も亡くなっていることをわかっている状態で悩みを話していることである。みよを演じた藤定花菜子は「みよがなぜこの世を去ったのか、どのような人物で、家族や明石にたいしてどういう思いを抱いていたのかを話し合い、みよの深い感情まで把握した上で演技に望んだ。感情をしっかりと見せるみよを演じるために喜怒哀楽を声にのせた。柿本との掛け合いでみよの心の変化を表現できればと思う。」と述べている。

「柿本」はみよと話し合う不思議な人であり、その実際は神社の神主という人物である。また、みよの悩みを聞きみよの心情を変えていく重要な人物でもあり、ある意味もう一人の主人公であると言える。柿本を演じた田中進之介は「柿本の第一印象は“つかみどころのない不思議な人物”だった。ゆえに演じるとなっても本当に神主なのか、そもそも人間なのか。と様々な考えを持った。そのあと話し合った際、柿本について詳細を教えてもらったが、それをすべて伝えるのではなく見る側から“なんなんだろうあの人は？”と思わせ、あくまで“年齢不詳の不思議な人物”であるように演じる方が作品の雰囲気に合うのではないかと考え、取り組んだ。」と述べている。

「ひのか」は二人と比べて出番が本当に少ない。しかし、彼女がいないと物語としてはうまく成立しない重要な人物でもある。みよの妹であり、みよが亡くなったことを今も肯定しにくく感じている、そんな女性である。ひのかを演じた柏木美来は「姉との関係性やひのか自身が成長するまでの思いを考えながら役を演じた。背景を話した際にでた、姉のように大人っぽく振る舞おうと頑張りながらも妹らしいところがあるという、ひのかの人柄を出せるように考えた。」と述べている。

どの役の役者もキャラクターのことを丁寧に考え、そしてそれがうまくはまっているのですぐいと改めて感じている。

●『ある晩のこと』について（根來悠）

僕は幼い頃から、本の世界、物語の世界に憧れ、小説サイトに何度か小説を綴ったこともあった。しかし、そのことごとくを未完で終わらせてきた。『ある晩のこと』は、そんな僕がはじめてまともに完成させた物語である。この作品は、ごく普通の会社員の佐藤が、ひよんなことから見ず知らずの女性、道敷と、道端の植え込みに座り、お酒を飲むことになるところからはじまる。この作品が生まれたきっかけは、明石の街について調べていたときに、明石にあるとある神社を知ったことだった。そこに、新型コロナウイルス感染症流行に伴う飲食店の時短営業や残業帰りの会社員などの要素を添加し、この作品は生まれた。

光栄なことに上演作品の一篇に選ばれたときは、嬉しい反面、不安でもあった。しかし、佐藤役の上田さん、道敷役の藤田さん、照明・音響の皆さん、裏方の皆さんのおかげで、拙作は、形になった。本当に感謝に堪えない。

この物語で特に思い入れがあるのは、登場人物の二人である。佐藤はありたい自分と実際の自分の間で苦悩している人物として作られた。彼のありたい自分は「優しい人間」、そのため、理不尽なお願いでもつい引き受けてしまう。しかし、実際の彼は人並みに理不尽に怒り、苛立つ人間であり、「優しい人間」になりきれない自分に心をすり減らしている。

一方、道敷は素直に自分の感情を表に出しており、人の不道徳を肯定しているふしがある。そういった対比は、中盤の二人の問答のなかでより顕著に出ている。道敷役の藤田さんのお気に入りのシーンもこの問答のシーンなのだそうで、このシーンは僕が一番力を入れて書いたシーンであるので、その努力が通じたのであれば脚本担当冥利に尽きる。

佐藤役の上田慎也は、「この作品の面白いところは、人間と神様が対話するところなので、人間である佐藤がどのように神様と関わるのか・表現するのかが大事になってくると思っている。佐藤は、内気な性格で優しすぎるが故、仕事を押し付けられてしまう。その日は色々不運が積み重なり、途方に暮れていると一人の女性（神様？）・道敷さんと出会い、相談にのってもらう。佐藤は、自己主張のない、ただ利用されてしまう虚しい人間という印象が強い。だが、その人間性にこそ面白みがあるのだと感じ、私と少し似ている部分があると思っている。なんだか親近感が湧いてくる。この物語は、佐藤の人間力をどうリンクさせていくのか、佐藤自身をどのように観客側にアピールするのがカギになってくる。不器用ながらもまっすぐに生きようとする姿が、なによりもかっこいい。頑張りたい。」と述べている。

道敷役の藤田野有花は「この役を演じる上で楽しいことは二つある。一つ目は生まれて初めて鬘をつけ、ロングヘアになれることである。何か一つ普段の生活では身に付けないものを取り入れることで、道敷という女性になりきれている感覚を手に入れることができる。二つ目は普段使わない言葉遣いができることである。関西弁を使わずに会話することが最初は難しく感じていたが、何度も演じているうちに「こんな風に話したら、もっと道敷に近づ

「アタシノアカシ」

けるのではないか」という想像が膨らみ、非常に楽しく感じている。

その反面、難しいこともある。稽古の中で最も難しいと感じているのは笑う演技である。作り笑いのように聞こえてもいけないが、心から笑っているなかでも少しの不気味さや、相手役の佐藤を手のひらで転がしているような不思議な感覚を、与えなければならないのがこの役の難しいところでもあり、演じがいがあるところでもあると考えている。

私のこの作品の中でのお気に入りのシーンは、物語の中盤、佐藤が道敷に仕事の愚痴をこぼすシーンである。テンポの良い掛け合いのなかでも、二人の温度差がみえる場面でもあるので、是非その温度差を感じ取ってもらいたい。

これから小原先生にもご指導いただく中で、どんどん演技方をブラッシュアップし、音響や照明の効果も上手く使いながら、見ごたえのある作品に仕上げられるよう尽力したい。」と述べている。

●『明石の城には誰もが集まる』について（山崎広陽）

この作品には、「皆が集まる場所」と「親近感」という二つの要素を込めた。明石は皆さんの故郷だったり、居住地だったりする。そこで更に誰であろうと入れる公園という場所を舞台にすることで、人では無くても集まることが出来る暖かい場所として明石を描いた。

見る人にとって身近な劇にしたかったため、皆の口調はそれっぽく、現代人は等身大であるようにしてもらった。

喜春姫役の石井杏奈は「今回舞台上で演じるということが初めてだったので、全てのことが難しかった。自分たちでどういった動きがいいか考えたり、自分たちでは思い付かないことを演出の先生のアドバイスを聞いたりして練習したので、とてもいいものが出来上がるのではないかと思う」と述べている。

右之助役の森棕祐は「右之助という現代人ではないとても難しい役作りに苦労した。プロデューサーの方から右之助という人物の性格を聞いたときに自分とは違うタイプの役で初めは言い回しなどがとても難しかったが、プロデューサーや小原先生がヒントをくれて右之助になりきれていたと思っている。この役ではみんなと違い浴衣を衣装として着用した。人生で着たことがなかったので、それも楽しみの一つだった。残念ながら延期が決まってしまったが、時間に余裕が出来たので完璧に仕上げて頑張りたいと思う」と述べている。

左之助役の本杉俊一郎は「自分の人生において、何かのキャラクターを演じるということは、初めての経験であった。配役された、左之助というキャラクターは臆病で弱気な性格でどこか自分に似た部分を感じられた。自分と似ているからこそ、自分自身であってはいけないのではないかと！と自問自答する事は難しい事であったが、同時に楽しさを感じている自分がいた。発表当日では、練習とまた違った感覚が湧いてくるのだろうなという予感がする。それは緊張であり恐怖だ。しかし、それらを楽しむことが出来ればきっと新しい愉しさに出会えるはずである」と述べている。

まっちゃん役の橋本翔斗は「芝居をやるに当たって、やはり声や表情は非常に重要であり、

「アタシノアカシ」

どんな作品でも積み重ねが作品の質に直結すると感じた。ゼミ生と演技について意見を出し合ったり、親睦を深め合ったりできて非常に楽しかった」と述べた。

梅野役の頼実玲奈は「自分が演じる梅野は、バランス的存在で、人を引っ張っていく性格である。演じてみて、関西弁を使うため、とても演じやすいと感じた。まるで普段の自分のように演じることができ、ありのままにいられる役だ。延期公演での舞台上、この役を演じきりたいと思う」と述べている。

竹崎役の田中柊也は「演じてみて、私は役に憑依するのではなく、自分自身が演者になるのだと感じた。元々作られた役になりきるのではなく、そこに本来の自分を入れ込むことが演じるということだと感じた。自分を入れ込むためには自分を知っておく必要があると思うので、これからは自分を知っていく時間も作っていかうと考えた」と述べている。

この様に、初の試みながら役者の方々は前向きな言葉を残してくれた。私自身もこのような活動は初であり、至らなさに不甲斐ない事も多々あった。しかし、良い形には皆の協力のお陰でなつたと自信を持っているため、本番を心待ちにしている。

III・役割分担

二つ目に行ったことは公演に伴う役割分担である。役割に関しても全員の希望を取り、プロデューサーが分担を行い、一人一つ以上の役割を担うこととなった。役割分担を明確にし、全員が何かしらの役割を担うことで、一人一人が公演の成功に欠かせない存在であるという自覚と責任を持つことが狙いである。またすべての役割においてメインとサブを決めることで、ゼミ全体の組織化を図った。これについては、変化すると予想される環境への柔軟かつ継続的な対応を行い、より円滑に業務を進めることを目標とした。その役割分担表は以下の通りである。

	メイン	サブ
プロデューサー	藤田野有花、田中柊也、 上田慎也	
舞台監督	竹本朱里	
MC	上田慎也、安田侑花	田中柊也、橋本翔斗
受付け	頼実玲奈、藤田野有花	
美術	竹本朱里	
情報宣伝	矢野杏子	【ポスター】 益田波華、森山聖夏 【チラシ】 石井杏奈、藤定花菜子、柏木美来 【パンフレット】 頼実玲奈、藤田野有花、本杉俊一郎
撮影	谷日向子	矢野杏子

ホームページ	谷日向子	
動画編集	谷日向子	
アンケート	藤田野有花	竹本朱里

① プロデューサーについて

今回に関しては三名体制でのプロデュースを行った。三名それぞれの報告文である。

・藤田野有花：私がプロデューサーとして行ったことは主に二つに分けられる。まず一つ目は各作品、各役割の進捗状況の把握である。演出家や各役割のメンバーとコミュニケーションをとり、業務の進捗を確認、催促するなど、全体が円滑に進むよう意識した。二つ目は中山教授からの報告や指示を、全体へ共有し担当者への詳細な指示を行うことである。疑問点や大まかな対応策などを、必ず教授に確認を取り、まずは自分が一番その内容を把握できている状態にしてから、全体へ共有するよう心掛けた。

チームの中でリーダー的立ち位置になることは初めてではないが、自分自身も役者やそれ以外のタスクをこなしながら、すべての役割の状況を把握することは非常に難しかった。さらに感染対策として稽古、本番ともにさまざまな措置が必要であることや、感染拡大の影響で公演の延期が決まったことにより、スケジュールの見直しをする必要が出てきたことなど、柔軟な対応が求められる場面が多く、苦労した。ゼミ生とのコミュニケーションを欠かさないことで、信頼関係を築き、公演当日までの様々なハードルを越えていくことができると考えている。至らない点が多いと思うが、決してトップダウン一辺倒にならないよう意識し、公演成功までをプロデュースしていきたい。

・田中柊也：プロデューサーとして、スケジュール調整、チームの現状把握などを行った。

時間の使い方が今後の課題だと考えた。全員のスケジュールを合わせるのは難しく、作品ごとにスケジュール調整を行い、作品ごとに仕上げていく必要があったと感じた。また自らが属する作品に関しては、演出家に任せるのではなく全体の把握をしているプロデューサーが足りない部分を補足できたらより良いものになると感じた。また現場における進行だけでなく企画の進行の方にも力を入れることが出来ればメンバー全員が安心して本番を迎えることが出来るのだと感じた。今回は延期になったが、with コロナと言われるこの時代を踏まえ、どのようにしてお客様に安心していただくか、どのようにして私たちが最大のパフォーマンスを発揮するかを考え、今後の本番を迎えたいと考えています。

・上田慎也：プロデューサーとしてチーム全員のスケジュール調整、今後の方針の決定、チームごとの現状把握など、ゼミ生全体の指揮をまとめる役割を担った。今後の課題として、余裕をもったスケジュール計画を作成する必要があると感じた。具体的に、小道具・大道具の完成する日時や、全体を通しての演劇稽古の時間割などである。ゼミ生全員が、一緒に何か一つの作品を創り上げていく過程が、とても充実したものだと感じている。コロナウィルスの影響によって延期せざるをえない状況になったが、私たち自身が健康に留意し、お客様が安心して劇場に足を運べるよう、適切な対策を講じていきたい。

② MCについて（上田慎也）

MCの役割は主に、最初の挨拶と公演時による注意事項の説明、各作品の間にあるつなぎの一言コメントなど、全体的な盛り上げと同時にスムーズな進行を行うことである。少しでも、話す内容を把握しておくことと変に緊張しすぎたり詰まったりする心配がなくなると感じている。そして、何よりも大事なのが、お客様が理解しやすいよう話し方や、手順を明確に踏まえ、進行することである。今後の課題としては、MCの入れ替わり方法をもう一度見直すことである。また、コロナ感染を防ぐため、マイクの使用の際には手袋の着用と消毒を徹底的に意識したい。

③ 情報宣伝について

情報宣伝はポスター、チラシ、パンフレット、ホームページの全4班、計10人からなるチームである。以下に、それぞれの班からのメッセージを載せている。

・代表（矢野杏子）

私は情宣の代表として、ホームページやパンフレットなどに使用する写真を撮る役割を担った。コロナウィルスの影響もあり、常にマスクをしているため目元しか見えない。そのなかで状況をどのようにして伝えられるのかが一番の課題であった。マスクの中でしている表情を目元だけの写真で表現できるか心配し大変だったが、楽しく撮影できた。一人一人が輝いて見えるように撮った。そういった部分を見てもらい、雰囲気味わってほしいと思う。そして、情宣のメインとして頼りない存在であったなど、反省すべき点がたくさんあるように思う。延期公演の時はメインとして活動できるようにしたい。最後まで気を抜かず頑張っていく。

・ポスター班（森山聖夏、益田波華）

ポスターを作るにあたり、まず重要な日時、作品名、注意書きなどを大きく書き、簡潔に相手にわかりやすく伝えられることを重要視した。コピーだけでなく、絵の具を使うことにより重要な日時等の文字を強調させ、色味で力強さを表現した。そして、そこに黄色などの柔らかい色味も加えることで、原色を強調させ、バランスを整えることも考えた。また、ポスターの役割として相手に情報を伝えるだけでなく、見る人に興味を持ってもらうことも重要だと考えたので、演者の写真を加えてみたりもした。デザインを考えるのは大変だったが、すごくいい経験になったと思う。

・チラシ班

藤定花菜子：チラシの制作にあたり、作品の不思議な雰囲気が伝わることを意識し、目を引くチラシになるように作成した。延期になってしまったが、チラシを見た人たちが公演に興味を持ってもらえるようこれからも宣伝活動に励んでいきたいと思う。

石井杏奈：今回、「アタシノアカシ」が延期になってしまっても残念である。この舞台を作るにあたって演者や裏方についてたくさん学ぶ、たくさん準備した。そのた

め、それらを早く披露出来る日がくるのをとても楽しみにしている。

柏木美来：公演が延期となったが、宣伝期間ができたので、これを利点に多くの人に見ていただけるように、宣伝活動を行いたいと思う。

・パンフレット班（頼実玲奈、藤田野有花、本杉俊一郎）

私たちはご来場者の皆様に配布するパンフレットの作成を行っている。全員の顔写真を掲載し、各作品の舞台となった場所の写真も掲載した。また、ご来場者の皆様への公演後のアンケートも作成し、パンフレットの中に挟み込んでお渡しするようになっている。このこだわりのパンフレットが、今回の公演をキャンパスライフの大事な 1 ページとして残すための一助となれば嬉しい。

・ホームページ班（谷日向子）

無料のホームページ作成ツールを使用し、PC とスマートフォン両方に対応したホームページを作成した。デザインや構成は主に映画・演劇・ライブなどのサイトを参考に、シンプルで見やすいものになるように心がけている。文章だけでなく、練習風景の写真やインタビュー動画を掲載し、私たちの活動に興味を持ってもらえるように工夫した。延期公演に向けて今後もブラッシュアップを重ね、ユニークで面白いホームページを目指す。

（ホームページ：アタシノアカシ 2022 <https://atashinoakashi.wixsite.com/2022>）

④ 舞台美術について（竹本朱里）

今回作成した舞台美術（大道具、小道具）は以下の通りである。

作品名	大道具	小道具
『夕暮れの夏』		花束（お墓参り用）
『ある晩のこと』	<ul style="list-style-type: none"> ・ 植え込み ・ 賽銭箱 ・ スワンボート 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 缶ビール（小） ・ レモン堂（小） ・ 瓶の日本酒 ・ アクエリアス ・ コンビニの袋
『明石の城には誰もが集まる』	<ul style="list-style-type: none"> ・ 池 ・ 池の周りの草 ・ 喫茶店の机と椅子 	<ul style="list-style-type: none"> ・ お皿（カレー、パスタ、かつ丼） ・ フォーク、スプーン、お箸 ・ コップ ・ 七味

今年度の大道具・小道具は、無難なものから「そんなものまで自分たちで作ってしまったのか？」といったものまで、全体的に見て多種多様な作品が完成した。正直、大変な部分もあったが、その中で出来る限り自分たちのこだわりをもって、一つ一つ丁寧に仕上げたことで素敵な作品を完成させることが出来た。

大道具・小道具をつくるうえで気をつけたのは、劇を観ている方々に、一目見てその場面を想起させることができるかということである。その中でも一番こだわりをもって作った

のは、『明石の城には誰もが集まる』で登場するスワンポートである。初めはスワンポートなんて素人の私たちに作ることが出来るのだろうか、どこから作り始めればいいのか、などさまざまな不安があり、思うように作業は進まなかった。そんな状況下、美術班だけでなくみんなの発想力、美術力といった中山ゼミ生がもつ多くの力を駆使して完成させることが出来た。見栄えの良さにももちろん注意したが、このスワンポートで特にこだわった点は、外部からの見え方である。劇中の世界観を崩さず、劇に集中してもらうために客席のどの位置からでも内部の構造を見せないようにするという工夫を、みんなで懸命に考えた。どこをどう工夫すればみんなが納得いくものが作れるのか、アイデアを出し合いながら何度も試行錯誤を重ね、このスワンポートを作りあげることが出来た。

このようにスワンポートだけでなく、他の作品で使用する大道具・小道具も各作品の垣根を越え、全員で楽しみながらゼミ生一丸となって作品を作りあげることが出来た。

延期公演の際、お客様には中山ゼミ生渾身の大大道具、小道具にも注目しながら、作品の世界観に浸っていただきたい。

⑤ 動画撮影・編集について（谷日向子）

稽古中は可能な限り撮影に徹し、講義や課題の合間を縫って映像の確認・素材の収集・編集を行った。毎週 1 時間超えの映像が溜まっていく。その都度確認し編集計画を立てるのは、非常に時間がかかる作業であり、困難を極めた。そのためどのような編集にするのか、構図や BGM を現場で考えながらカメラを回さねばならなかった。

編集については誰に何を伝えたいのか目的を明確し、その実現に最適なデザインの手法を選ぶことを心がけた。

編集の工程にはカット作業・字幕作成・音ズレ確認などがある。必要に応じて BGM・SE(効果音)・補足テロップなどを加えている。

なお、制作フローや構図、フォントの選定、配色など、撮影から編集までの全ての工程については、坂本伸二著「特別講義デザイン入門教室」を参考に進めた。また、公演延期を受け、急遽ゼミ生へのインタビュー動画を作成。今後も活動記録の一環として、ゼミ生の等身大の姿を積極的に映像に残してゆく予定である。

⑥ アンケートについて（藤田野有花）

アンケートは、ゼミ生が慣れない中、稽古を通じて作り上げた作品が、どのようにお客様に伝わったか、どのように感じていただけたのか、またどのような宣伝が効果的であったかなど、客観的なフィードバックを目的としたものである。お客様が観劇して終わりではなく、お客様とゼミ生がコミュニケーションをとれるような、アンケートまでが芸術作品の一部となれることを目標としている。

今回感染対策の一環として、非接触で対応できる Google Forms でのアンケートを取り入れている。(同じ内容で紙媒体のものも用意し、お客様に選択してもらう方式をとる。)

「アタシノアカシ」

以上がゼミ生からの活動報告である。19名それぞれが自分の強みを活かし、一丸となって取り組んでいる。この19名にしか出せないカラーを前面に出し、ゼミ生にとってもお客様にとっても、思い出に残る時間を作り出していきたいと考えている。3月に行われる延期公演にご期待いただきたい。

IV・総括（中山文）

報告書にはぜひ学生の言葉を掲載したいと思った。執筆のチャンスを与えることは素晴らしい学びの機会だからである。彼らには「作家の言葉と役割分担表は必須。なるべく全員の言葉が欲しい」と伝えた。どういうものが上がってくるかと楽しみにしていたら、締め切り通りに、全体をきちんと網羅した立派なレポートが提出された。彼らが真剣に1年間の振り返りを行ったことが伝わってくる内容だ。

コロナ禍も2年目に突入した。遠隔授業には慣れたものの、やはり対面授業が楽しらしく、毎回ほぼ全員出席の授業が続いた。前期は、明石についての題材を一人ずつ発表して共有し、想定している自作戯曲のあらすじの発表を経て、初稿戯曲のリーディング発表を行った。毎回の授業後にはドットキャンパスを通じて、全員から発表者へのコメントをもらうようにした。これが学生同士の距離を縮めるのに役立ったようだ。また前期末には小原先生からそれぞれの初稿に対して丁寧な講評をしていただき、それに従って修正稿を仕上げることを夏休みの課題とした。早い時期から自分の作品をゼミ生に共有してもらったこととプロの目が入ったことで、いずれも自信をもって上演できる作品に仕上がった。

後期の最初3回はビブリオバトルである。久しぶりに会うゼミ生に馴染みつつ人前で声を出すことができ、演劇作りの肩慣らしとして有効だった。その後、修正稿のリーディングを行い、LINEの投票機能を使って上演する3作品を決定した。小原先生がプロデューサーチームの結成を提案され、女子リーダーを二人の男子がフォローするバランスの良いチームが誕生した。初めての試みだったがその効果は抜群で、彼らを中心に「アタシノアカシ」プロジェクトが大きく動き始めた。情報は確実に全員に共有され、HP作成が象徴するように今年の「アタシノアカシ」はすばらしくスマートなものに仕上がりがつつある。

今回の報告書のおかげで、これまで気づかなかったゼミ生の個性を知った。大道具、小道具、ポスター、アンケート……どの担当者も楽しそうで、なにより仕事へのプライドを感じる。筆者がこれまで「巻き込まれ力」と呼んできた人文学部生の潜在力は、まだまだ可能性を秘めている。今後も、学生が主役になる場をできるだけたくさん提供していこう。オミクロン株の蔓延で、1月上演は延期を余儀なくされた。3月28日に本番の幕が無事に上がることを心から祈る毎日である。

本研究は「JSPS 科研費 19K12491」及び2021年度人文学部研究推進費「映像制作を用いた人文学的教育に関する整備発展」、同「コロナ禍における地域の記憶の継承に向けた実践的研究－地域研究センター明石ハウスを拠点として－」の助成を受けておこなった。